

2021年
3月号

全障研鳥取支部事務局長 澤田淳太郎 (さわだ じゅんたろう)

今月のテーマ

全国一斉休校による学校教育への影響は —全障研鳥取支部のとりくみ

2020年2月27日の夕方、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、首相から全国一斉の臨時休校が要請されました。突然始まり、長期にわたった休校措置は、子ども・家庭に甚大な影響を与え、学童保育・放課後等デイサービスにも深刻な負担を強いました。はたして、その実態はどうなっているのか。調査開始時点できびしい感染が及んでいなかった地域の全障研鳥取支部だからこそ、その実態を明らかにする調査を担う必要があるだろうと、全国の知己に協力を呼びかけて、リモートで「障害児教育における新型コロナウイルス関連問題検討会」(以下、検討会)を行いました。

実施内容は表の通りです。また、障害児教育学や発達心理学を専門とする研究者が、報告に対する議論に加わり問題点を明確にしていきました。各回の事後には、鳥取支部内でさらに議論を重ね、問題点を3つに絞りました。

一斉休校は本当に必要だったのか

まず、突然の一斉休校が学校現場にどのような影響を与えたのかについてです。突然の休校で卒業式や入学式が行えなかったか、規模を縮小しての実施になったこと、放課後等デイサービスを中心に福祉現場が子どもたちの受け入れに大変な状況だったことなどが語られました。

休校後の対応では、福祉現場に子どもたちを丸投げしたという指摘がある一方で、教員がデイサービスに協力したという事例もありました。対応に追われるなかで、「感染拡大」への危機感から現場教員の間で対立が生まれそうだったという話も出ました。

また、肢体不自由児教育の現場では、普段から感染症対策などの衛生管理に気を配っているにも関わらず、突然の休校が決まり、自分たちの日々のとりくみが信用されていないと感じたという意見もありました。

子ども・家庭への影響も大きかったです。親が在宅勤務で子どもに関われるといういい面も見られましたが、収入が減り経済的にきびしくなる家庭もあったようです。肥満傾向や昼夜逆転の生活になる子どもの姿など、健康状態への影響も見られました。休校期間が長引くにつれ、虐待に近い状態に陥るような家庭の様子も語られました。

このように、学校現場や福祉現場の混乱や対立構造をつくり出し、家庭の困難を生じさせた突然の全国一斉休校の功罪をはっきりさせる必要があります。

学校のあり方が問われている

2つ目は、学校のあり方が問われているとい

表 検討会の概要

第1回	2020年 6月14日(日)	知的障害特別支援学校及び特別支援学級の教員を招待し、報告及び議論
第2回	2020年 7月5日(日)	肢体不自由特別支援学校の教員を招待し、報告及び議論
第3回	2020年 8月30日(日)	前2回の調査の報告者全員で、まとめにむけた議論



検討会は鳥取大学をセンターに反対とリモート併用で行いました

*報告書の詳細は、全障研鳥取支部のホームページ (<http://jaddtori.iinaa.net/2020.html>) で公開しています

うことです。小中学校の現場で「学習の遅れ」が問題にされ、授業を進めるという圧が強まったことが指摘されました。そして、「個別最適」な学びとして、オンラインで個別学習を進める動きが活発になっていることも確認できました。オンライン授業に関する検討内容は、本誌2020年12月号で三木裕和さん(鳥取大学)がふれている通り、コミュニケーションをとるなどと言われることの影響が危惧されます。

また、オンライン授業に向けて機器を整備されたのは、「準ずる教育」の教育課程がある肢体不自由特別支援学校だけであり、知的障害特別支援学校ではオンライン授業をやっていないという事例も確認されました。新学習指導要領の看板とも言える「主体的・対話的で深い学び」は実施できておらず、「学びを止めるな」という学力保障の動きは、教科書や学習指導要領に載っている各教科の学力をつけるということだけがねらわれている様子が伺えました。このような実態は、一斉休校という国の誤った政策判断を「なかったことにしよう」としているものであり、休校により失われた子どもたち同士の学びの時間は取り戻せません。

検討会の終盤には、「学校は楽しいところなんだよ」というメッセージを子どもたちに伝えることが大切なこと、先生や仲間と「いっしょに

学ぶ”ことの価値、心動かしたことに對し、周りに受け止めてくれる人がいることといった、学校での学習や教育における大切なことの再確認が必要ではないかという意見が出されました。学校で先生や仲間と学習をしていく意義、教育の意義を改めて確認しないとけません。

「コロナバッシング」と障害者問題

最後は、バッシング問題などと障害者問題との関連についてです。新型コロナ感染が拡大するなかでのさまざまなバッシングの様子は、病気に対する科学的根拠の無いまま差別的な政策が進められたハンセン病の歴史と似ているという意見が出されました。一方で、バッシングの背景に、ウイルスによる健康や生活への不安から、人々が追い込まれている状況があることへの理解も必要だという意見も出ました。ただ、障害者問題の歴史を振り返ると、多くの人が苦しい現状において、障害児者に対する福祉や教育への公費支出に「お金の無駄遣いだ」などという論調が起きることが危惧されます。そのような問題に対抗できる準備が必要だと考えます。

今回の検討会を通して、職場を越えて語り合える仲間がいることの大切さを実感しました。感染拡大が身近に迫るなか、それぞれの職場でも語り合うことを止めてはなりません。